新春座談会

回想
――昭和23年1月

話し手：
武居 有恒（たけい ありつね）
京都大学名誉教授

松林 正義（まつばやし まさよし）
元建設省砂防部長

聞き手：
川名 信（かわな しん）
元北海道庁
住宅都市部技監

まとめ：
内田辰丸（うちだ たつまる）
砂防広報センター参与

と　き：平成20年7月3日
ところ：砂防地すべり技術センター

昭和22年頃

まえがき

なんとも破天荒な話である。本来ひとかどの社会人が為さねばならぬものを、雛にもならぬ卵たちが自ら殻を突き破り、外に出るや否や走り出し、会報〔新砂防〕発刊という大事業を成し遂げたのである。

昭和23年〔新砂防〕を世に出してから60年、砂防学の進歩や、砂防事業の推進に半生を捧げ続けた老兵たちは、川名作成の資料に目を通しながら若き日の思い出を語った。

川名の資料

「ここに一冊の大学ノートがあります。〔新砂防〕を出そうと決めてから発刊にいたるまでの各学生の活動を克明に記録しています」

座談会に先立ち、川名はこう切り出し、古びた大学ノートを丹念に読み取りパソコンに入力した資料を配り説明を始めた写真-1。

川名「大学ノート第１ページ１行目に昭和21年12月12日、発刊について相談をするために、学生たち８名が第１回の集まりを尾崎家でもったと記されています」

出席者は次の通り。

3回生尾崎雅篤、昭和19年9月京都帝大に入学、22年9月卒業、同学年の砂防専攻生は彼一人、このグループのリーダーである。

2回生奥田英夫・菅　恒夫・澤井敬勇・塩見準一・武居有恒・松林正義・村野義郎の7名は20年4月入学、砂防を専攻し23年3月卒業。

日置象一郎はオブザーバーとして出席、京都帝大17年９月卒業の砂防担当講師である。

川名「第1回の集まりの際、かなり突っ込んだ議論がなされています。1.京大関係者のみの雑誌にするか。2.全国砂防技術者や関係者の雑誌にするか。3.先輩に相談することも決めています」

資料の説明が続く

川名「ノートには世相を反映したびっくりするような、苦笑するような、感動するような事柄が綴られていて、学生の〔新砂防〕創刊に対する意気込みがありありと読み取れます」

当座談会にいたる経緯

川名「昭和22年私は京都大学に入学し1回生の時松林

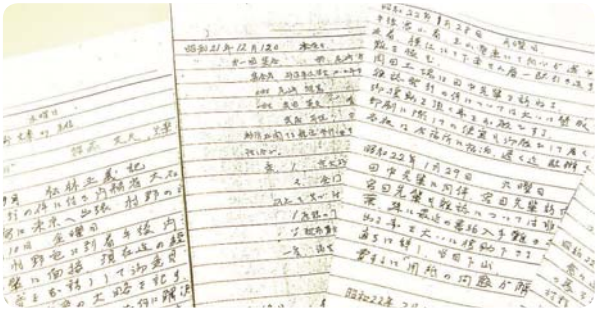


写真-1 当時の記録が克明に綴られている連絡ノート

さんと同じ下宿に住み、〔新砂防〕発刊に走り回っている３回生の武居・松林さんなどの姿を見ていました。何があの人たちを駆り立てたのか当時から疑問を持ち続けていたが、〔新砂防〕発刊後60年を経て、内輪話を直接聞きその記録を残そうと思い立ちました」

60年も熱い思いが続いている。

川名「幸い砂防・地すべり技術センターのご配慮でこういう機会を提供していただき感謝いたします。また武居、松林両先輩、内田さんの出席有難うございます。

前置きはこれくらいにして本題に入ります」

発案者は誰か

川名「分からないことが一つあります。あの時代にこんな思い切った発想をしたのはいつ頃からか、また８人のなかの誰だったのですか」

武居「皆集まって駄弁っているうちに、なんとなくそういう話になったのだが、言い出したのは尾崎さんだったかな」

どうもはっきりしない。

川名「尾崎さんは、ぼそぼそと話す人で、そういうことを言い出す人だったのですか」

尾崎以外の品定めをするが。

武居「他の者が言い出すとは思われない。あんなけったいなことを想いつくのは矢張り尾崎さんかな」

松林「云い出しは尾崎さんで我々は下働きだった」

尾崎は実家が大学の近所であり、松林達はよくその家に集まり彼の母親が苦心して集めた材料で作ったなけなしの食べ物を遠慮会釈なく食い散らしていた。

尾崎は不思議な男である。卒業後砂防界に身を置き、県土木部砂防課長を歴任、退官後はコンサルタント会社の社長を務めたが、専心職務に当たったとは思えないというのが衆目の一致するところである。

フラメンコから小唄までこなす趣味人であり、特にこの手の催し物になると途端に張り切り、ぼそぼそ言葉どころではない、成功に導くのに力があった。

武居「尾崎さんは人を引きつける魅力的な何かをもっていた」

川名「たまにシンポジウムとか出席すると、尾崎さんが必ずいたな」

学生を揺り動かしたもの

川名「何に動かされ、どういう想いで〔新砂防〕を発刊しようとしたのですか」

武居「その頃砂防関係の本はなく、村上先生の講義以外情報は全くなかった。それで色々資料を集めて是非皆に知らせようという気持ちが強かった。」

武居氏

時代背景：昭和20年8月15日、我が国は戦に敗れ、国家は疲弊、国土は荒廃、追い討ちをかけるように地震・豪雨により各地で土砂災害発生、多くの死傷者が出た。

当時土砂災害対策に当たっていた技術者たちは、技術指針や工事施工例などの資料を求めていた。

一方、巷では明日の食べ物を求めて買い出しに走る人や、当てもなく呆然と闇市場を彷徨う人が大勢みられた。

松林「戦後日本全体が混乱しているなかで、〔新砂防〕発刊というかたちで日本の再生に役立ちたいと痛切に思った」

敗戦という大きな衝撃が走ったろうが、それにもめげず若き学徒たちは混乱した日本の再生に立ち上がり、〔新砂防〕創刊という夢に向って突っ走り始めた。新生日本の一側面でもあった。

先輩たちの胸の内

学生だけでこの事業が成立するはずはなく、第1回の集まりで相談していたように、まず先輩を訪ね理解と協力を求めなければならない。

手分けして全国各地を飛び回る。旅行さえもままならない時代にである。

川名「先輩達の対応はどうでしたか」

松林「村上先生にはひどく叱られたな」

川名「どうしてですか」

武居「当時学生は勉学にいそしめばよく、そういうもの

に手を出すなという風潮だった。それに村上先生には砂防専攻学生に対する監督責任がある。発刊が失敗したときの責任を考えておられた」

松林氏

村上恵二は京都大学砂防工学教室の主任教授である。謹厳無垢明治学者の典型であった。

卵は親鳥の懐で孵化を待てばよい。自ら殻を破るなということだろう。

松林「私も村上先生に対し、敗戦で皆意欲を失って世の中が混沌としているこのとき、我々若者がなんとかしなければと、この企画の成功に燃えているのですと反論した」

先輩達の意見を大雑把に分けると、年配者は反対、中年は慎重に、若年は賛成である。

内務省砂防行政の大御所赤木正雄は〔新砂防〕の発刊には反対である。

赤木曰く

「紙入手の問題がある。出版にこぎつけられるのか。

京都帝大の先輩間の連絡は止めよ」

派閥化するのを危惧したと受け取れる。昭和3年東京帝大で発刊された会誌「砂防」の発刊に反対した手前もあったのだろう。

川名「伊吹さんも反対だったようですね」

松林「尾崎さんと二人で伊吹さんのところへ行った。話をしていて尾崎さんは大分頭にきたようだった」

伊吹正紀、昭和2年京都帝大卒農業工学1期生、砂防の大先輩である。

伊吹曰く

「砂防のみ集まるのは宜しくない。

砂防工事を一時中断し、国家経済の調整にあたれ。

指導官の地位を捨て、労働組合の一員として生活権の獲得にあたれ。

砂防雑誌の紙は小学校に回せ。

雑誌発行の時期ではない」

川名「奥様とお子さんが病気で家事を一人でやっておられたが、国家の財政や社会情勢について憂慮されていたのだろう」

訪問した尾崎たちは意気盛んである。

「先輩の意見は大いに参考にしますが、われわれの発刊企画の決意は絶対に捨てません」と伝えて伊吹のもとを去っている。

「砂防特論」は後年伊吹が著わした名著である。

遠藤隆一は含蓄のある意見を吐く。

「派閥に固まらず、広くあらゆる人の賛同を得るよう」

武居「遠藤さんから赤木派、アンチ赤木派に気をつけるよう言われたな」

一徹な赤木に批判的な砂防屋がいたのも面白い。

武居「〔新砂防〕が全国的な広がりをもったのは、後年京大教授になった遠藤さんの働きであった」

遠藤（京都帝大7年卒）は当時四国で内務省の工事事務所長を務めていた。

武居「遠藤さんは砂防屋ではあったが、土木関係工事事務所勤務がほとんどで土木屋でもあった。それが〔新砂防〕の広がりに繋がった」

先輩以外にも広がりが

武居「神戸市の緑地砂防課長山本吉之助さん（北海道帝大卒）や内務省六甲砂防工事事務所長の杉本培吉さん（東京帝大卒）なども協賛してくれたな」

しかし各先輩の意見はともあれ、訪ねてきた後輩達を彼らは宿泊、食事と手厚く遇した。欠乏困窮のなかでのことである。

それに各現場を案内し砂防の何たるかを教え込んだ。学業を放り出しての学外活動であったが、生きた砂防と砂防に対する先輩の心意気を学び学業に劣らぬ成果であった。

ついに創刊の目途がつく

困難は先輩への説得だけではなかった。

川名「松林さんは紙々と騒いでおられたが、紙の調達には苦労されたでしょうね」

川名氏

武居「紙は澤田教授（京大農業土木学）が斡旋してくれ、なんとか間にあった。澤田教授は戦時中陸軍の技術将校をしておられ、その時代の幅広い人脈のせいだと感心した。三重県まで紙の受け取りにいった」

宵っ張りが早立ちし、津市に向かう。商店で現物を確

かめ、契約成立、代金を支払い紙2連を受け取る。1/2連を持ち帰る。途中警察の統制物資検問を受けるが大学の証明書のため何とか通過した。
川名「資金はどうでしたか」
武居「闇屋や脱税屋以外は皆貧乏だったが、その中で先輩たちが支援してくれ、有難かった」
川名「いつ頃から発刊に対して目鼻がついたのですか」
武居「昭和22年の春頃になると、先輩や関係技術者たちの理解が深まり、原稿の約束や会費の提供が多くなり、安堵し勇気が湧いてきた」

川名「村上先生も賛同されたのですか」
武居「村上先生も腹をくくられた」
川名「腹をくくられたとは」
武居「諸戸さんは砂防学界の、赤木さんは砂防行政の頂点に立たれていた。二人に張合われたと思う」
　諸戸北郎は東京帝大の砂防工学教授、内務技師、農林技師を兼務していた。また村上は東京帝大卒である。大正14年京都帝大砂防講座を担当したが、まだ諸戸・赤木二人の後塵を拝していた。

発刊に向けて最終会議をもつ

　昭和22年6月7日、半年の熱烈な活動により協賛する先輩が京都に集まり、学生の活動報告や先輩達の意見交換がなされた。

武居「資金や印刷部数、原稿などが議論された後〔新砂防〕の名称をもって発刊することに決定。我々の願いが取り上げられた」
川名「その後も色々の難儀があったでしょうね」
武居「資金や紙の手当てにはずっと苦労した。原稿もなかなか集まらなかった」

川名「資金や紙はどうされたのですか」
武居「資金は諸先輩や現場技術者達の手助けがあった。紙は２号以降は配給に頼れるようになった」
川名「原稿集めはどうでした」
武居「原稿集めには苦労したが砂防屋以外の人も応じてくれた。それが砂防技術の進歩にもつながった」

川名「発刊6号でしたか、鷲尾さんの常願寺川改修計画についての論文全一冊は圧巻でしたね。参考になりました」（表-1第6号）

　鷲尾蟄龍は元内務省富山工事務所長を務め砂防計画についても一家言の持ち主であった。

　話が少し横道にそれ始める。
武居「常願寺川については赤木さんと鷲尾さんと計画論に違いがあったな」
川名「赤木さんと諸戸さんも違いがあったようです」

　諸戸は立山カルデラの上流からの階段堰堤の施工を提唱し、白岩の高堰堤計画を批判した。
　赤木は下流の砂防堰堤施工より白岩堰堤への集中投資を強く主張した。
　鷲尾は河川工事にあたって洪水ごとに流下する石礫に悩まされその防止としての本宮堰堤必要論であった。
　立場や経験による砂防計画論に相違があり、興味深く参考になる点が多々ある。
武居「今は工事によって常願寺川全流域が割と安定していて、色々批評が出てくるが、昔は何やら恐ろしいような、鬼が城あたりは土石の量がすごかった。三者の計画があいまって効果をあげているようだ」

記念すべき昭和23年1月

　数々の障害を乗り越え昭和23年1月会報〔新砂防〕創刊号が発行された。母体は京大農学部砂防工学教室内に置いた新砂防刊行会である。
武居「学生一同感激尽きるところを知らずであった。終世忘れ得ないと思った」
　やがて〔新砂防〕各号は若き現場技術者の手引書となっていく表-1。

表-1 〔新砂防〕の目次

発行年月（西暦）	タイトル	執筆者
創刊号 昭和23年1月（1948）	会則 創刊の辞 『新砂防』発刊に際して 治水砂防工学特論（Ⅰ） 開墾と水害 我が国治水方策の動向 思ひ出ずるまま 新潟県能生谷地すべり地について 砂防工事と土木機械 上京日誌 今後の砂防について	 村上　**恵二** 柿　徳市 高月　**豊一** 五十嵐　**眞作** 木村　**弘太郎** 日置　**象一郎** 谷　勲 柿　菊市 山本　**吉之助**
第6号 昭和26年11月（1951）	荒廃河川処理特集号 常願寺川改修計画目次 第一章　総説 第二章　流出土石量の推定 第三章　貯砂堰堤の性質と其の作用 第四章　貯砂堰堤の選定 第五章　常願寺川改修計画の概要	鷲尾　蟄龍

こういうエピソードもある

発刊決定の夜懇親会が開かれた。前々日その材料仕入れに淡路に牛肉を求めにゆく。淡路は海に囲まれているから、魚なら分かるが、肉というのがよくわからない。多分密かに家畜を処理したのだろう。

川名「肉を淡路に買いにゆくとあるが、どういうことですか」

武居「当時蛋白質は極度に欠乏していた。塩見は神戸の滝川中学出身である。阪神間の事情に詳しく、淡路に闇で肉があると知り、手に入れようと島に渡った。経理は塩見の担当だったな」

若き日の思い出話が続く

武居「菅、塩見、村野とはよく連れだって先輩の許をおとずれた。奥田、澤井は個人の事情が許す限り働いてくれた」

会誌〔砂防〕と会報〔新砂防〕

〔砂防〕は昭和３年7月諸戸北郎ほか関係者によって創刊された。母体は東京帝大農学部内に置く砂防協会である。昭和19年1月(93号)戦争の激化に伴い戦後の復刊を強く望みながらやむなく休刊にした。

だが戦後種々の事情により廃刊になる。

参考：当時の関係学術雑誌には〔土木学会誌〕〔日本林学会誌〕〔東京帝国大学演習林誌〕〔水利と土木〕などがあった。

内田「村上先生が〔新砂防〕の発刊を躊躇されたのは諸戸先生に対しての遠慮ではなかったのですか」

武居「それはない。むしろ村上先生は諸戸先生とは相入れなかった。諸戸さんは赤木さんと合わなかったな。赤木さんと村上先生はオーストリア留学がたまたま同時期で、そこで知り合って親密になったようだ。諸戸さんは東京帝大で明治33年砂防講座を開いた時の助教授だった」

諸戸は〔砂防〕創刊前の総会に、内務省土木局の砂防担当技師赤木正雄を招き賛同を得て、全国ベースの〔砂防〕にしたいと考えていた。

赤木は諸戸の教え子である。よもや先生に向かって異議をとなえるとは皆思いもよらなかった。

「内務省土木局も府県の土木の砂防担当者もこの企画に携わっていない。賛同するわけにはいかない」と発言し赤木は席をたった。

総会はしらけムードだったらしい。

〔砂防〕は発刊されたものの林野畑色濃い会誌となった。

武居「赤木さんは東大では受け入れられないから、京大にきた」

川名「赤木先生の集中講義の半分は、内務省に入った当時、砂防屋の扱いに関する自身の体験談だった。」

一方諸戸は〔砂防〕の年頭の辞に筆をとったが、その内容は皇室を崇拝し、砂防の推進とともに国家の政策についても強く支持するものであった。

〔砂防〕創刊グループにも燃えるような理念があった。

治山治水というが、治山がなければ治水は成立しない。治山には砂防の支えが必要である。

砂防は内務省土木局の所管だけではなく、林野や用水路、港湾、道路、海岸、要塞軍港まで含め土砂の移動により悪影響を与えるのを排除するのが砂防の役目であり、それを砂防協会が指導するという意気込みが行間に漲っていた。

内田「〔新砂防〕発刊に際してもそういう理念がありましたか」

武居「いやそこまでは考えていなかった。諸戸さんは気力があった。戦後当時は砂防の本や資料は何にもなかった。砂防に関する情報を集めたいというそれだけだった」

東大とのやりとりがあった。

武居「東大での〔砂防〕の帰趨について我々は全く念頭になかったが、日置先生は東大を訪れ、〔新砂防〕の発刊について了解を求め、了承されたようだ」

日置さんの思い出に移る。

武居「日置さんは粘り強く人当たりがよいのでこういう交渉に向いていた。なによりも世に疎い我々学生に道理を教え、〔新砂防〕発刊に際して行動に誤りがないよう指導された」

内田氏

東大で〔砂防〕の再刊を強く望みながら断念したのは、紙の入手など色々困難な事情があったろうが、諸戸の挫折も一因だっ

たのだろう。

しかし〔新砂防〕は砂防事業の発展、技術の進歩という理念については〔砂防〕の理念を引継いでいる。

どちらも机上の空論に走らず，工事現場の技術者の役に立つ記事を記載すると強調している。

戦後の砂防技術新米生は、各地で砂防の先輩が少なく〔新砂防〕を読み、調査方法、工事設計、施工を独学で学んだ。貴重な現場指導書であった。

環境とはなにか

川名「環境についてどう考えておられましたか」
彼は半生を北海道の土木行政に携わり、自然環境に強い関心を抱いていた。
武居「当時は環境なんて全然考えていなかった。むしろ食料をどうするかが国としても個人としても問題だった」

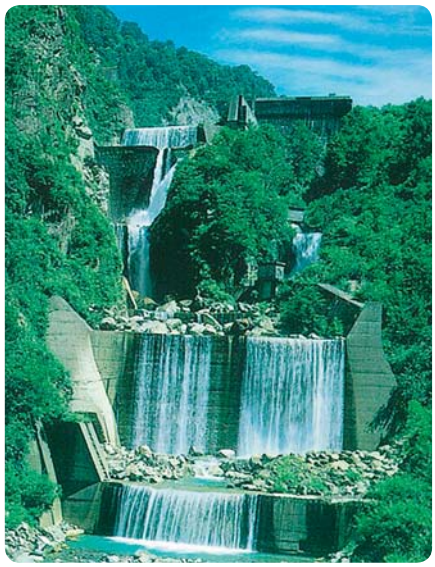
川名「今はどう考えておられますか」
武居「環境の問題には二つの側面がある。身の周りの感知できる小さなスケールと地球規模の大きいスケールである。氷山や氷河の融解が何に原因するか、地球規模何万年かをとってみると、今ぐらいの温度変化は何回も起こっている。情報が多くて分からない」

一転、川名は傍聴していた池谷理事長に矛先を転じた。
川名「今の砂防堰堤をみると、妙な恰好の物を造ったり、石をベタベタくっ付けたり、それで環境に配慮しているという。そこの所がよくわからない」
池谷「砂防工事には生態系に対する影響と、景観に関する問題があります。

川を堰き止めてクローズになりがちなのを、出来うるかぎり元の状態にするオープンスタイルにしようとしています。景観については先輩達がとっておられた工法を見習い、緑を山に帰すよう努力しています」
川名「コンクリート堰堤も白岩堰堤のように年月が経てば自然に溶け込む。あえて奇をてらう必要はないと思う」

池谷「時間も景観にとって一つの要素ですね。
山腹工についても時間を経て在来種を増やすようにしています」
武居「外来種は一時栄えても、もともと基盤を強くする種ではなく、やがて滅びるものだ」

白岩堰堤施工直後


現在の白岩堰堤

池谷「砂防工事は意識するしないの前に結果的に環境を保全する性格のものです」
川名「砂防の原点は昔も今も変わらないということですが、永続性が重要ですね」

環境に話が及ぶと甲論乙論果てしなく続き、結論を得るのが容易ではない。だが大方会談はお開きの段階に来ている。

川名「本日はセンターの方々が我々の会談に対し、特別の便宜を図って下さり、また武居、松林両先輩の出席についても厚くお礼申し上げます。最後にお二方にあの時代の感想を」
武居「あの時代だからこそ学生だからできたのだろう」
松林「きっとそうだね。今の若い砂防技術者が我々の心意気を知ってもらえば喜ばしい」

あとがき

〔新砂防〕発刊に参画し実現にこぎつけた学生8人中、尾崎雅篤、菅 恒夫、塩見準一、村野義郎の四氏は故人である。